

## トピックス

## ★内視鏡検査の鎮静剤の運用継続中

従来からご要望のあった鎮静剤使用下の消化管内視鏡検査について、説明と同意を得る運用や検査前、検査中、検査後の安全確認の体制を整え、2021年7月から「鎮静剤」として予約できるようになりました。年々、鎮静剤を利用する患者さんが増えています。「機器共同利用」でも申し込みいただけますので、内視鏡検査が苦手な患者さん、検査に対する不安の強い患者さんがおられましたらご活用ください。



## ★新型コロナウイルス感染症に配慮した検査・診療体制

のべ3年にわたるコロナ禍の中、日本消化器内視鏡学会の提言などを参考に感染対策を徹底し、極力検査や治療を中止することなく継続してまいりました。内視鏡検査はエアロゾルが発生する検査であることから、医療者側には、ガウン、手袋、マスク、フェースシールドの徹底、患者さん側には、問診の徹底、穴あきマスク着用、エンドバリア等のシールドの活用を行うなどしてきました。これからも感染対策を徹底し、内視鏡診療を維持してまいります。



## ★その他

CT一体型アンギオ装置が導入され、2年が経過し、ますます肝細胞癌等の精密検査、治療がレベルアップしています。



大腸腫瘍に対する内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)の症例数ますます増加し、さらに安定した手技となっています。

難治性の胃食道逆流症(GERD)に対する食道生理機能検査(食道内圧検査、食道インピーダンス・pHモニタリング検査)も継続しており、「胸焼け」の精密検査の選択肢として定着してまいりました。

## 特色

消化器内科では、消化管(食道、胃、十二指腸、小腸、大腸)、肝臓、胆道、膵臓等の消化器疾患の検査と内科的治療を行っています。

消化器内科は、内視鏡、超音波、血管造影といった検査技術、それらから発展した治療技術を駆使して非常に幅広く診療を行います。さらに各種消化器がんに対する抗がん剤治療も行っています。リスクを伴う検査、治療を行うことが多いため、患者さんご家族に十分に説明し、同意を得た上で、他科、他職種とも連携してチームで診療を行うようにしています。特に消化器外科と連携しながら(消化器センターの項参照)、標準レベル以上の検査と治療を、迅速に、最善の形で提供できるよう心がけています。

検査分野では、上部消化管内視鏡、大腸内視鏡検査の機器共同利用として、地域の先生方からの検査申し込

みを随時お受けしております(詳しくは当院地域医療室にお問い合わせいただくか、当院ホームページをご覧ください)。

また、夜間・休日の消化管出血、急性胆管炎等、緊急内視鏡や血管塞栓術を要する患者さんに対応するため、オンコール体制を敷いています。

当科は、専門医の養成にも力を入れており、現在、下記学会の認定施設となっています。

- 日本消化器病学会認定施設
- 日本消化器内視鏡学会認定指導施設
- 日本超音波医学会研修施設
- 日本肝臓学会関連施設
- 日本胆道学会指導施設
- 日本膵臓学会指導施設

## 対象疾患

**胃腸疾患:** 逆流性食道炎、食道・胃静脈瘤、胃炎・胃潰瘍・十二指腸潰瘍(ピロリ菌感染症)、潰瘍性大腸炎・クローン病、食道がん・胃がん・大腸がん、MALTリンパ腫、GIST(Gastrointestinal stromal tumor)など

**肝疾患:** 急性肝炎、慢性肝炎・肝硬変(C型肝炎、B型肝炎、自己免疫性肝炎、原発性胆汁性胆管炎、非アルコール性脂肪性肝炎など)、門脈圧亢進症、肝細胞がん、肝内胆管がんなど

**胆道疾患:** 胆嚢結石・総胆管結石、急性胆嚢炎・胆管炎、胆嚢ポリープ、胆嚢腺筋腫症、胆嚢がん・肝外胆管がんなど

**膵疾患:** 急性膵炎、慢性膵炎・膵石症、自己免疫性膵炎、膵嚢胞、膵がんなど

## 診療内容と実績

### ★当科に特徴的な薬物療法

C型肝炎、B型肝炎に対する抗ウイルス療法は、近年、格段の進歩を遂げています。当院でも、常に最新の治療を受けていただけるように体制を整え、肝臓がんの発生を抑制するためにも、積極的に治療を行っています。肝臓専門医が常勤しており、多くの場合、国の助成を受けながら、治療を受けていただけます。

潰瘍性大腸炎やクローン病に対して、抗体医薬品と呼ばれる注射薬での治療を積極的に行っています。また難治性の潰瘍性大腸炎に対して、プログラフという免疫抑制剤を使用する体制も整えており、実際に有効であった患者さんも経験しています。ゼルヤンツ(JAK阻害薬)、ステララ(抗IL-12/23p40抗体製剤)での

治療も導入しています。

また、ピロリ菌感染陽性の慢性胃炎、胃潰瘍・十二指腸潰瘍等に対する除菌療法も積極的に行っています。

### ★内視鏡診療(胃カメラ、大腸カメラ)

当院の内視鏡システムは全台、狭帯域強調画像(NBI)対応です。拡大観察機能対応の内視鏡も多数常備しており、NBI観察と組み合わせることで、詳しく粘膜表面を観察できます。がんの広がりや深さをかなり正確に把握でき、治療方針の決定に役立ちます。

経鼻内視鏡は、径6mm弱の細径内視鏡で、通常径に比べ、より安楽に検査を受けていただけます。当院でも現在4本常備しており、積極的に活用しています。

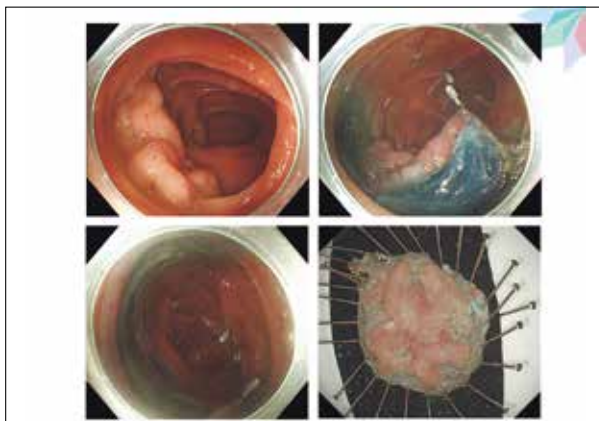
シングルバルーン小腸内視鏡は、先端部外径9.2 mmにまで細径化された内視鏡で、受動湾曲機能、高伝達挿入部を備えており、バルーン付きオーバーチューブと組み合わせて、小腸の奥深くまで観察したり、止血術、ポリープ切除術などを行うことができます。苦痛の少ない大腸内視鏡検査目的にこの内視鏡を用いることもできます。

大腸内視鏡を中心に、炭酸ガス送気による検査も積極的にいき、また、やや負担の大きな検査や治療内視鏡時には、鎮静剤・鎮痛剤を使用して、より安楽に検査・治療を受けていただけるよう配慮しています。

カプセル内視鏡は、カプセル型の自動撮影機能のついた内視鏡で、6~7mある小腸の観察を特別な負担なく行うことができ、当院でも年間20件を越えて行っています。必要に応じてシングルバルーン小腸内視鏡で詳細な検査や治療を行うこともあります。大腸用のカプセル内視鏡も運用しています。

胆道、膵臓についても、内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)を積極的におこなっており、超音波内視鏡を応用した膵がんの確定診断でも実績を挙げています(EUS-FNA)。

内視鏡治療では、早期消化管がんの治療を積極的に行っています。胃がんや食道がんでは、内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)を多く行っています。胃がんに対しては、年間約40件を行い、良好な治療成績を得ています。大腸がんに対しては、内視鏡的粘膜切除術(EMR)や内視鏡的ポリペクトミーを行います。大腸の早期がん等に対するESDも年々増加し、令和3年度は大腸各所の30病変に対して行われました。



また、内視鏡的乳頭切開術(EST)、内視鏡的総胆管結石除去術、内視鏡的胆道ドレナージも県下有数の症例数をこなしています。バルーン小腸内視鏡システムを応用することで、従来困難な場合があった胃術後の十二指腸乳頭へのアプローチも可能となり、胆管・膵管の検査・処置の幅も広がっています。

その他、消化管出血に対する内視鏡的止血術、食道・胃静脈瘤に対する内視鏡的硬化療法・結紮術等の緊急内視鏡にも対応しています。

#### ★超音波診療(腹部エコー)

当院の腹部超音波検査対応の超音波診断装置は、仮想超音波画像(CT画像等から再構成した仮想の断層画像)と実際の超音波画像を2画面に並べて表示しながら、検査を行うことができ、より小さな肝臓の腫瘍等を確認したり評価したりすることができます。造影エコー検査も積極的に行っており、肝臓の腫瘍の早期発見や詳細な検査ができるようになっています。肝炎や肝腫瘍の精密検査として、超音波ガイド下肝生検も随時行います。肝臓がんに対しては、適応のある症例に対して、ラジオ波焼灼療法(RFA)を積極的に行っています。初期の肝臓がんに対しては、手術に匹敵する効果があることが報告されています。肝生検やRFAの際には、適度な鎮静剤・鎮痛剤を投与し、ほぼ苦痛なく受けていただけています。

#### ★腹部血管造影・カテーテル治療(腹部アンギオ)

肝腫瘍等の詳しい検査のために、血管にカテーテルを入れ、造影検査を行っています。当科ではカテーテル造影をしながらCT撮影をすることで、腫瘍の個数や性質を詳細に調べるCT下血管造影も多数行っています。肝臓がんを栄養している動脈にカテーテルを進め、抗がん剤を注入(経カテーテル的動注療法)したり、動脈にゼラチンスポンジやビーズ等を詰めて、肝臓がんを兵糧攻めにする治療(経カテーテル的動脈塞栓術)も行っています。当科では、血管造影の際、手首の血管に針を刺しカテーテルを入れること(橈骨動脈穿刺)も可能です。足の付け根の動脈を穿刺する(大腿動脈穿刺)よりも検査後の安静が格段に短くなり、楽に検査が受けられると好評をいただいています。リザーバカテーテルを体内に留置し繰り返し動注を行う治療(リ



ザーバ療法)を行うことも可能です。

胃静脈瘤に対するカテーテル治療であるバルーン閉塞下逆行性経静脈塞栓術(BRTO)にも対応しています。

★化学療法(抗がん剤治療)

手術療法が行えない進行した消化器がんの治療として様々な化学療法(抗がん剤治療)が行われます。当院では、消化器内科・消化器外科の医師が、胃がん、大腸がんに対する標準的な化学療法を行っています。食道がんに対する化学放射線療法(抗がん剤と放射線治療の組み合わせ)も放射線治療専門医と協力して行っています。手術前や手術後に治療効果を高めるために化学療法を行うこともあります。胆道がん、膵臓がんの化学療法の経験も多いです。当院では腫瘍内科医師にアドバイスを受け、より適切な治療を選択し、継続できるよう工夫しています。

分子標的薬と呼ばれる新しい治療薬(アバスチン、サイラムザ、ザルトラップ;アービタックス、ベクティビックス;ハーセプチン、エンハーツ;ネクサバル、ス

チバーガ、レンビマ;タルセバ等)を使用できる体制も整えています。免疫チェックポイント阻害薬については、オプジーボをはじめキイトルーダ、テセントリク等を胃がん、食道がん、大腸がん、肝がん等で使用することが急速に増えてきました。これらの薬剤は、免疫関連有害事象(irAE)が起きることがあり、他科、他職種とも連携し対応しています。神経内分泌腫瘍、GISTなどの非常にまれな腫瘍に対する化学療法も行うことができます。これらの治療は、各種ガイドラインに準拠して作成された治療メニューで行っており、多くの場合、通院治療が可能です(点滴治療のための外来化学療法室があります)。

★緩和ケア

がん患者さんご本人やご家族が抱える身体の痛み・苦しさ、気持ちのつらさを支えるケアも大切な医療です。必要に応じて、院内の緩和ケアチームと連携し、様々な苦痛を和らげる医療にも取り組んでいます。

表 主な検査・治療手技の件数

	令和元年度	令和2年度	令和3年度
上部消化管内視鏡総件数	6,224	5,648	6,211
下部消化管内視鏡総件数	2,447	2,268	2,261
カプセル内視鏡	25	17	25
上部消化管止血術件数	98	123	119
静脈瘤硬化療法(EIS)件数	18	21	43
静脈瘤結紮術(EVL)件数	2	6	6
上部ESD件数	47	58	62
上部EMR・ポリペク件数	9	13	15
下部EMR・ポリペク件数	703	722	781

	令和元年度	令和2年度	令和3年度
大腸ESD件数	11	14	30
消化管ステント留置件数	18	31	42
超音波内視鏡件数	39	33	28
EUS-FNA	6	15	17
ERCP総件数	232	247	256
腹部超音波検査関係			
肝生検件数	25	33	37
RFA件数	30	19	30
腹部血管造影総件数	100	48	47

地域の先生方へ

平素は消化器内科に多数ご紹介いただきありがとうございます。地域の基幹病院、そして伝統ある赤十字病院の消化器内科(消化器センター)としての役割を果たすべく、日々努力しておりますが、ご要望、ご期待に十分に答えきれていないのが現状です。

当科では、これまで同様、がん発症抑制を目指したC型肝炎・B型肝炎に対する最先端の抗ウイルス療法、ピロリ菌感染胃炎に対する除菌療法、潰瘍性大腸炎・クローン病に対する最新の寛解導入・寛解維持療法を積極的に行っております。またESD・EMRを始めとした早期消化管がんの内視鏡治療、膵腫瘍等の

組織診断等の超音波内視鏡診療、造影超音波検査や血管造影を駆使した肝腫瘍の診療も多数行っております。小腸カプセル内視鏡、大腸カプセル内視鏡検査も行なっておりますので、適応を含め、いつでもご相談ください。

消化器センターとして取り組み始めた胃食道逆流症に対する食道機能検査(食道内圧検査、食道インピーダンス・pHモニタリング検査)につきましても、引き続き、お問い合わせ、ご相談に応じてまいりますので、今後とも、ご理解、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。